へ13
3553
26

一 慶長五年東紀七三揃六 同録
一 紫田三義大坂へ出府之事 并ニ三好入道見分之事
一 摂津表へ出張して出陣之事 并ニ諸将防戦討死しける

早稲田大學圖書
門 へ 13
號 3553
巻 26
早稲田 大學 圖書館
昭 33.11.10 受
藏 書

一厳鋪太平楽記大尾之巻

柴田之庄安太坂ゝ出府する事

附り之助入道見物之事

洪夜関東ハ太平の中ニ柴田之庄安源猪吉としてある

ゆり彼ハ今之平六代ぶしやう知恵之の勇者足利武部

大備源あり義國已後足利の祖にて義國より七代の孫

宮内小輔泰氏より中務大輔家氏より斯波氏を

号す尾張守高経の時に至り足利といふ家をたてる

斯波細川畠山と三家をたてる信長国を御す

高経は四代目斯波修理大夫義将越前国新谷の
国の侍として先祖よりの氏を斯波と
号する夫より代々斯波の家の執権となる
所なり新田の家は武将として足利家と同
一の格式なり尾張越前の尾張の家老と織田
と云ふ越前の家老を斯波の家の後に足利
をなるは義将の代に九州の仕置を預り
今に至る一統の時に浮き沈み流れ其家
退くは其故を申すに及ばず軍の評定し

人と争ひとなりし人道し世の人ありて林の中をゝく
數多の鴈飛来る時宍戸遠江守といふ人有りし矢
を擬し太刀て鴈を射落しは稽古の射様なり
鴈飛ぶとよそに何事に聞きけりゝ物を云ふる
まさずして將の行射つて二羽双ひし鴈の羽を
ぬいて大を一羽の鴈の餘を射落したるも
るを射る者なりしとも一羽を一矢に射
るある人弓の稀成る者ありと後人大に感じ
備して宇大將の本国へ帰るを聞きて

子孫なる武衛を尾張守となして一子庶を今を
後へ彼の是彼とて足利義輝の孫斯波因幡
跡を継ぐ管領職なりしかは今まて安世と
今また乱世諸國動乱上下村なく尾張の織田
信秀といふもの武衛の家老にて一國を押ひらしと
其職を延元年して子に至り見るよし如く濃國を攻
討ち持の功を積て子息上総介信長を
國の[illegible]揚りて京都も[illegible]すし幕下を取り去
戦功を厲ましつゐに[illegible]國を攻ならぶ信長は天下

の武将と仰かれ給ふに至りて美濃國大一の所領とし
て職事を給り将に信長公の御体に[illegible]なりと
文武ともに威勢をましけれは遂に北國の半美濃國
を幕下となしけれは天正十年の六月明智日向守
叛逆を企て京都本能寺にありて信長公を
討奉りしを羽柴筑前守秀吉公山崎
にかゝりて一戦に明智を亡し主君の仇を報じ給ひ
是より御威勢日々にさかんにして[illegible]のみならず
三七信孝の輩もよりて勝家を亡しけるとも

國のうち藩上をなし、されども終に天下人心のはなれ
のなかりしは、泰時以下の人々を治めしは大凡十一年
にわたりて[illegible]時頼が徳を守りて[illegible]
北条の末にいたりて、相模守高時に至り、奢を極め
ところを知らず、人の恨みを[illegible]
しかるに[illegible]
[illegible]人の心を安んずる[illegible]
[illegible]
[illegible]

此威勢輝きし武家の棟梁は[illegible]を守りし厳
重の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

是で我乳のある男も女房も女房とも云ば
そうかつ人までひとしく仕付しれ子供までなさけなきまで
その次に家安堵の大望が彼は米田横領が
悔れとも先祖の西し是を継ぎ終らい
年んと云事し相も人おも人の継ぎ月し和郎を
してゆやる御らし[illegible]利さ子に上す大将けし
百世縄有を門出や徳力三つすも甘衣
かゝる色を荒行は方稀文様等生つてもの懐
時をうつさず指しなれして振かへて文のこの大将

これ也つかいまいらちわもろうするこの浅ましくあやまるもの
毎しと仕事の上これ世やうにて仕かくその尽し待つる
土を何をその上の身にも家を守り庄田浦留へ免がし子
これ也相勝高父の後を継いで民苦しみ年
月々を率い今日より大いに時[illegible]聞え
往来撫子天命[illegible]
白く歌を計ひとも竜門をたてまつる
前んとて[illegible]ちまするもの
太閤の上も云ふ[illegible]申すものまで

まこと光秀を取立給ひし恩はかくのごとくなるに
程日もたゝずして光秀を誅ぜられ過し光秀が大将家
来し信長公の功により天下を治めらるゝ滅亡の御ぶ
命し秀吉が害せしをうけずして君父の仇
を報ずることを以て秀吉を推して天下をおさめし
くも案の考信孝とならずして命を帰するの意
に秀吉を推して天命に従ひて国家をたもつ
秀吉伸し信長の家の遺をあらためんとて縄を
解て信孝をなく陰にて信孝の遺言

有合信孝を討たれ給ひしの事は抜んでて上を
祈りて滝川一益の御沙汰なりと有
人と僕ぬきんでて太閤を七か古信長の三子八行
雄成あらず勝家とこそ依て滝川と光秀が
天下を経略する秀吉を討んとその志天が下
君をしく思ひ父を討てしこそ是と申す
君のうしろ大君の意をそむき家を亡ぼし
坊主家臣の如く討せしやりはしが終
誤て丹羽天御待なしなされば彼がその手に終

ふしぎなる事かな御国にかくし此者が縄をときせ百種をあたへられば長安明庵平伏して継ひとでたとおさまりて伊平孫介しく我も縄を鉄せんとせしが出て来るならば此旅よありがたく収び拝し親かうじも大勢の前に仁の方がに佐介が宮路殿上にて世の中をされ候えしかして一礼をのべ虎の尾をふみ毒蛇の口を御のがれあるべし此上は秀吉を起こし肴の妻にしてしまうと其みち道筋の手にもちいだしてもかもとむ

行衛しれず成りにけり此仕掛にて有ける太閤は此事をも御承知を害せんとすれども御意を逆らう事なりみな君をすずしめ恥辱の思い命をかけて我が身をも打もの申すとの事を由すべからず無念の思い保寿院を始め一同恨みの者ども今日の太閤すらも嘆かれ此方へ参らせ是によりて長安親子三郎を捕へて磔にかけの悔は御めでとしくて太閤殿にて初めて家督を継がけれるたる此親類も是まで

なりしかども家督を継ぎ祖父
の先を敬すべしと遺言して其身は帰参し
失なひし父の仇を報ずる術もなく生の中
まじく武蔵守を頼みて一人をとらへ致捨
上京し成長するに及んで祖父の仇を討んと心を揺
しに天下みな北朝の盛りを見て一向城
取くもやむなき事のしだいを念じつゝ
年月を送りて南朝の一統をまちてありしに
まゝや時節到来を待ちて

乃渡人致武者の用意もなけれバかなはず
きこえし昔のよしみにて報仇待ちする力
なりて筆紙を尽して此事の報
野もむかしは海道の便ある軍の伏
は此所を用意に及びし和僧こそ敵する
かれの起りやその外名字を尋ねしめ
なせるさしめしてあせ給ふ素懐を遂る
身の事に係りて懐を及しつゝ女様も
是けなくて雑兵に取きたる危急を

けんやのびらうげゆへ寄手の軍ずハ一向かなハざれ
ば夜にまぎれをともなひ入合みけるが寄手よ
旗律由まる力を見しまする雑兵家内太刀打
松山の前をへだて意をも遣して又おもひ詰め猛兵
備中守を討取しげ給の仕形への御手段
奉る事なし御味方は役をもそへそらし私心ありハ
の國武藏にもしるそふ極く付尽しなれ
まれいで勝中ずとのへなれバ備中守がうし
丈ハ名ある覚ゆるう筈道すそへハ某田の血脈

過ぐる月をと今しく余勢をむかへまして其勢へ
軽利に及ばず別も道ある三家の猿兵ハ何卒しくも一戦
無事をいそげすいのちぞ無二無三に家来也何卒
しても太刀を取ても一方根拠の絶えを敷じ
なさらざるとハ今もを生えて天下何卒とる事也と見る
定法の事のみなれバ元より其人が手を進みて罰ゆる
目根職人に指揮のまゝし有徳田が手なれバ一だ
人の大閣の御代に滅亡しく神ハ御あれもなき閣
過ぎなりしゆへ何のまゝみても無きに在るべきつた

極もなし何年けむの軍ぞうるなかりとさまざま文
なきことは両家へ仕官させんとかくとせ信を通し
ある書中へ封をせだにやかて孫子等へも見す
と深しうじもなりやうもみかく凡そふりとなし
近臣が申じけるも尽とぞすしれりしに悉みて
ここにすてあくへんにばかりをとどまらひらうかず討死さ
するなうとて逃れし九江の余杰等へ付を借
帯さへ入れらはいかりて收びらまだ余へ寄るかし
乗るもとかても色しるわのも帰るを思ひまい

甚へ陳之殊使者を以てまひ旗ぞ軍ざうなる程をと
諸兵を背けん振るとし後々の如かかる軍勢
それの事なれらも必ず如ずするなかへ至るてと
金をひ備されしみはいばい使する此蔡文甫は振せ
が進むときくて馬をとりけるこては人ぞおもひ
め岡なさんして乱軍ぞあふて指揮せん人々へ
無用なるし制しさればいは振せ仏くすへる
は数め合しれは軍兵を背ありやつぢをよって
すで着丸く魚のぞかを恨やし見へ乗ていうをも

爲に是迄来りしと委しく語る小栗大和守
今最期なりし我子の身のうへ聞およびて一
陣を進んとするを見て和田孫千五月は大坂の
手天王寺の西門を志ざして押寄ける兵
の前に進みて淡路が兵町田が飛々合図
会スハ今為山へ人の右小田人も大和守に合戦
最も早く我の格も後戦に進みける小笠原信濃
いまだ人の弟子ハ大力の者共ある大名
陰を捨進しも家来なる鉄炮をもち

宮にむかつて河田孫門を始として二百人討とりす
信濃守の首級を揚て鳥井の頭をとつて
くれと上下あつさりしが其身の是後頭に二八才と書
身を是抜清海入道ハ是大人とも其上に大ぜいの中に
おかれましく其と合せしも其ときは大力の者共にて
惣軍ハ此の時比枕へやつて鬼に對面し
其の鬼とも皆首級へ家来として一度にかけちる
ものし敵をと共に破り是くと世に名を下知し給ふ

おちりけむ此こしの人をとかみ給ふ
あはらせつほこと給ひかへ
とかくし札なる時まての事の合戦に味方
大勢討死せしけれは今も又たゝかひのかれある
けれ共小笠原信濃守は猛勢にて打出は細川出羽守
御大将も頼信を先陣するかとて我の軍兵よく
軍兵共寺の御長兄弟討死し赤松鳥羽の院
を始め源平両陣を追落し行くへと人数をれは
西へくれさとうちもして細川の軍勢を追かける時に

両方合図の時を打振ては大軍何方へか行けむ
らすぬなる時に侍と今進は南の方氏井伊及
堂の下辛世と打落て谷へ四郎其郎
の兼に伝えて来ぬの前めて悪する升程
免しあたかもさせてし宮家に以る侍と今を見たそ
流しとおし入る中に御ところ切て逃る丹
侍も河を追り夜雪源平が路の中にて取り
て結局入てする侍と今見打も退て切て
出る軍兵共ともに小勢なれは

悠々すらず浪花にくらし西にあまとやく
瀬戸すみの都しも京の浪花するさま見(あん)深(ぶか)う
清水漕(こぎ)遠(とほ)く京にて芝居をたてる役者をおほけ
夷人ら数々を遊(おち)籠(ち)し身をすくいあし江戸の
大人大〇一件の人丸ちて〇らさ時には通人との一
つる能く知らしと芸当しらとさむ名ある遊
さまるなる粋(むらうど)どもになし飛ぶるちや弓あれは花を
えんしと花は世の花として世にて道を志なりゆ
わかものゝ藤はしみれ人とて丹保なる當世風く

まな上達を出世をと言はゞす名字さみしたゞ
反様そゝいば抜世すめつるへ下に只今
手なと檀(だい)しせまあそべし半端なる上手して達
又之しと通すむしにもが年もゝ右様より時は
りし男のなりまししに乗りゝとる筆つみゆくと甘
あるるてる子ぬ今東風猿を取てし伽(から)羅(ら)〇きて
月と藤様月撰ものまゝば塔と合(ゑ)掌(じよう)
之深き人まる大夫分にうきなかなかしや又了
分する句を深見から浪方丹後屋掾書

近づきける兄弟死入しけるを見て宮を
遁し給ふ一方をかけ破りつゝ落しうへにて河の
者共まで中々あそばして川をとりて将軍とその
勢を追ひて落ちける所を敵をとりしかば敵をへ
入れ替ひて打ちとも近寄るも見えしかも大将として
合戦しは縁方の勢を案じて給ひし
給ひ入れて大将の中に取りこみ見えて打落
されける手負を見て負に将軍の内を切り給ふ
四方八方の所から人を組ふて首をそれに

まれなるを山田合へとも若狭をも打てし宮を
給ふ首をとれ付けて清水合をもて斗へし
生田の馬場をとりて近衛へ城る所に二十
給ふ人近づく首をとりて敵追なるを人々し
西へ向かし大将人数ひ敵大勢を防ぎ御所へ
まで人は皆ひて近衛は雑兵ありけるに又敵大勢
近寄りける間近しく敵の中へ大人の所に寄
く討死しし己を残花まで上りて下り捺た
る大将を始めし雑兵を討ち取りて死

まうする時に至て九月十日の夜に入て陣に夜寄の合戦のま
ありける
摂津大夫入道は大将として御陣を
渡り諸将討戦して死しけるの
七日も経て半の刻に頗る手になれバ勢ハいかゞ攻ん
と聞える僧ハ三十人余て光陰く暮かる
後人衆も出て長田津中庸津田も寄せ
庸田ねと気を立て摂津長入文字を中立て
大将して太刀の後へ落して立残の残を立

て主上ハ摂津の国住吉へ行幸なる由を聞へしかバ
きこしめしの後へ飛騨を云て人々すゝめ
大将子息父ハ吉野へ平井行方豊後関東
秋谷飯後池田毛利黒田渋谷蜷川河野山内
民部の井上杉本小笠原酒井大島の後
一旅々ひ軍勢の後へ死を成くわけ其所
又入寺も細尾南北松本の庄人の後人々
じく乱ひし浅み今川小出安藤長沢
入りし攻戦とにくも軍勢の後へ召出ひやり

みし楽出家の後にも其芸業をつきまもれざく
今度も是迄ありしに浅井の人々は田は細山津山之丈
清の薩摩兵衛尉四郎押立て若狭守を見つけ
て突かゝりて入かゝる所を見て新田義貞
極楽神保甲斐の守白石板谷の数千とひとしく
皆散々に打破る所へ細川の人々又両方一度に
来合ひ打払ひを追かけ攻めかゝる所に集人後
すら心合せ浅人を間に取まき国中三郎後
来合せるゝ切りて出るを打とる永井佐渡守

内藤修理亮も後に続き津山三郎
浅野も左衛門今日の細川の薩摩守東国の
者どもに出向ひ清めのことし今は浄土の
勇士多くも討れて死ぬを見て討
死すれども四人の勇士も手ず討
軍の兵も散々に切入り浅井ども
其時さて浅井は浅人々は田は細山津山
に入出るを兵衛大勢をつれて押寄せ
て攻戦ひ中にも木の山村助右衛門次郎

清見と鉾を物ともせず二人を長の振まはすみ
すぐるあひだ其時野田帝助は中田なにがし
給ひし実なき清水は清人の斜なる陣山は中段
山きは自のくらわもい東へ往く人の命を取りて切りつく
追いきたれば藤太の所へまいる跡は追ふて六八
只打捨ると見られけるが是を関東の強
施しも打立て退てしに人より取りてはさき
馬からおりて清春は大将男ましてへ人の首を見れ
御意ありとて清水之時は振律甚八文子八沿

清えと丈服ましくて打殺てくに人を相し追
討入あらまに人も討取りて三葉ぬけ和
今まで見届け丹伊友堂丸と打破り討取り
又乱れて千人入義もして名も相の乾式を討
菜師山の領の中に藤をとくし天子並に轡と
切取り細を悉め入白も円六升は御と子切の石
よ持せよし持る都督ずする切腹し打寄せ
使の口ふ〆恵まるはずして一人をと討手とと天
十人命ぶ連けりけ腹をりし切腹す前をき漸

あらしまい自害しあるもまたあるも有
青る文九郎あゝ見えも鉄ゆぐ結九郎子を従え
せう御をとりしる見上けるやうち上南條の爪
将姫殿をとらへかへしかうて津の乞と乞あてを
成せし之術大夫中大納の御へ了発きれことを手へて
発しける所へ川を越え大国衆納守も山大保元
松平と右京とは土井大炊頭を行く土と城主の猪狩付
九をと化けしするる南しけりへしめつら与六消
るかりあちな至幸いう川姫へし蒐進めるもあり

ゆうし藤川も有らしれ人の山をと流し井伊殿前る
播磨守文殿へて在るものあるを付らあ謀反
掛か合も見えるかへし本村之中かれをせいかるかるらん
御ゆき△の南下丘とかの村の士の猪るてをきて
とう見る作成井伊守る成大塚田高出不在中より
武あ殿之様の来る出兵荒川迷見は後の押へ
すう村合へ入子のの者にへつし南振つの村越て
石川内沖田内とを打殿へしと井伊殿殿へ酒井殿を
鎮の小納めれいあやて本村をよれの足の

そうして右方ゟ女夜叉川にて弥兵衛相撲取を
出勝負し増田弟子ハ池田氏が手に取りかけて
ふして又ここに打返しが右方の増田ハ
声をかけし相撲に家の勝負して又近江の人ハ
中路氏が道堂を出して今中なりて今まで大関
に家の方門を取りし横ゟ突出しかけて今
日本の名人の勝負は八分まで勝負をとり相
合ひに体をくずし右の腰右肩の紐を関の
ぶく相撲として勝負近江の者の名ハ嫌ハれ

入る本の時に度量の内に相合取ると右方の
勇士近藤に右肩とて今勝負ハ勝負を見し合く
相撲して出して取そそくる荒川の大関中へ近
ごまがらい見る者の方々なる人々出し候を相手に
近江や出来の者ども見る出て生れと言ひ取
もとも出し候出るは如何と言ふ所の射く捕る
ほんの八寸の出来方に荒川が組ちのくるに右方に
出たるを取りし相撲にて人とて足の門の勝負をば
取ると見るとて着地したるに投けて勝負の手にかかる

継母孫市も声をかけしが大力なれバ継母是へと
すがりの継母ハ手早く縛り首押へ孫の若坊
ニ生捕せんとの心なり荒川ハ彦兵衛孫六郎せと
長刀の先ニて彦兵衛孫枝を突き市兵衛が首力を
突退て叶ハず倒れ伏す彦兵衛が首へ浪士の
手郎ども不届者へ切かゝる所へ大勢切殺し孫
太郎も不殺しと縄を取りむかし挫きとん
孫六も縁を門へ引寄せ拙者孫市が首
首つかみ取て其門の上ハ逃来る敵のとゞめ投出

其ま逃去る皆々迷ふなる様子もなし
逃さじと日振田伝兵衛が嫁与兵衛なる
荒ぶる兵刃を振るひ殺しを一人ハ
迄さしめ継母も孫兵衛門を開文
のがれ落来る者を斬るハ何事と日振
野辺兵衛も逃け孫をおしさしとする
そこへ継母孫の首をも取ると
捕へ急ぎとり辺兵衛門へ入縄を
拭ふ刀を以て継母の縄を取捨し辺

左無かつかつ人と突かゝりける四平次は傍らにて
其所を力に打て掛ると熊谷は振払て胸に引
ち付て首打落し投捨て走り出る所を足軽
又も其鳥を拾て突ける所を楯をたて持て
太刀を引ても道を乞ふ大熊谷が胸板を
打たるに流石あやまちかけし何かは知らず熊谷の
刀を鞘に納めて立帰りて向へ行き引返し無
其さま見る人ことも眼をすまして身に添てぞ
入ける程有し義は人々口を揃て熊谷

扨其以後に此所其道を吉右衛門きぬにもあるにこそ
猪のたぐひを追ふ人と立くも我ら共とするを傍なる
の者の目にいざかへ止まる所に誰とても熊谷此人の
猪熊も未だ合戦人に何とも詫言
鳥の脚を打て入荒川より突かゝる荒川の母衣
兄弟もろとも浪の者につけて駈出しけるを
其しきり出はせけりと其所をすべし此と引ても
其わせんとせんかの力の程の突と引て駈行に
人々突折ても鳥の羽を持て討てる

給ひたへ向和田度平もすゝと萬乃に好
和田はうゝ門院のみ信奉手まり投法にあ
和田の度平は連の人のなりしゆ無越人く
たすらめ古へ島土元と豆圓一乃大力あれしを
凡平井の武士巴女におはしまく大将と闘なりしまへ
合戦をひしらて逃うしまへ天然の名を抛りしまへ
軍のなかいも地にかへりても国に健なる城
中くまりそきれぬ旅つこ足もも忍ばなりし止り給
井手に向ひし大利なるの桐のての旅合の人蔵也

やうき乙の岩下とおもしいまことの勇將とは郷
辛休と大後は信し兵は合せし凡勇將にあ極
虚弱なる生身の人は津しあ持かなりすし山岳に
らをとあかぎむくとなの掾子の推まれ攻めやしゅへ
おとし城けいはれたい人はば撮れせすてしはまも又
いるの武士も将もしと婦人の血は討死を
するといふ其御世なはた武は成しそのし頭首を
乞とのれきしいは平なる身體ありしもかけます
雄もん著られきことにて連座しき

一　厭飫太平楽記　十月末より見終